

---

# 異世界での日常と非日常を楽しむ俺

ミズタニ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界での日常と非日常を楽しむ俺

### 【Nコード】

N0424Y

### 【作者名】

ミズタニ

### 【あらすじ】

いつも通り学校に言っつてその帰りぼっくり逝ってしまった主人公は神に会い異世界での生活を謳歌していく。

死んで気付いたら変な爺さんと会った

俺はその日いつも通り学校に行き、部活をやってその帰りに・・・  
・車に轢かれた。

「あー疲れた」

俺の家は学校から歩いて20分ほどのすぐ近くにあるので自転車ではなく普通に歩いてきた。そして信号を渡っているちょうどその時車が猛スピードでこっちに来ていた。まだ、車から少し距離があったのでよくれたのかもしれないが、俺はその時びっくりして体が固まってしまった。そして轢かれたんだが・・・轢かれて意識が消える前、最後に見た光景はもつとスピードを上げて走っていく車だった。

「ん・・・ここは？」

気がつくとも見覚えのある部屋にいた。

「ってもしかして此処俺の部屋か？」

見覚えがあるのも当然というか、自分の部屋だった。

「あれ・・・俺轢かれたんじゃないか？もしかして夢？」

「そうだよな、事故に遭うなんてことあるわけないか。」

「その若いの」

「うわっ!？」

気付くとベットの上に変な爺さんがいた。

「やっと気付いたか」

「いつからそこに・・・」

「お主が気がつくまえからおったわい」

「ってそれはいい、あんただれだ。それと、どうして俺の部屋にいるんだ？」

俺が疑問に思って聞いてみると、変な爺さんは少し考えるそぶりを見せるとしゃべり始めた。

「まず最初に言っておくがお主はしつかり死んだからの。そしてわしが誰かじゃが、わしはお前たちで言う神という存在じゃな」

「は？」

あたまでどこか逝ってんじゃないのかこの爺さん？というか俺今此処にちゃんと生きて存在してんじゃない。

「それはわしがここにお主を召喚まわつかしたからじゃ お主は生きていると思っっているようだが、お主は今魂だけの存在じゃ」

「魂？ というか俺、声に出してたか今？」

「だしておらん な わしがお主の心を読んだだけじゃ やっぱりあたま逝ってんじゃないのか？」

「逝っておらん そうじゃな、証拠をみしてやろう。」

そういつて爺さんがパチンと指を鳴らすといきなり景色が変わり、なにもない周りが白いだけの場所になった。

「つうお！？」

「これで信じたかの？」

「・・・神かどうかはともかく、どうしておれを召喚したんだ？ まさか死んだ全員にこうして会っているわけじゃないだろう？」

「そうじゃな・・・まずそれを説明する前にお主にいくつか聞かねばならんことがあるんじゃないか？」

「それはいいが何を聞くんだ？ 俺は人に聞かれるようなことはしてないし、特に特別なことを知っているわけじゃないぞ？」

「ああ、単刀直入に聞くがお主異世界に行く気はないかの？」

「異世界？」

「そう。 異世界じゃ、此処とは次元が違う場所に存在しているから、普通の方法ではどんなに時間をかけてもたどり着くことがで

きぬ場所じゃ。」

「どんな場所か聞かないと答えられないだろ。もしいつて人間が誰もいない未開の土地だったりしたら、俺切れるぞ？」

「そんなことしんわい。それでどんな場所かじゃが、簡単にに言つと文明的にはこつちで言つ中世くらいじゃな」

「どんな場所かはわかつたし行つてもいいが・・何をすればいいんだ？」

「それはじゃなどうしてお主を召喚したかにも関係あるんじゃ。」

「お主が行く場所は今は戦争以外は平和なんだがのあと十年もすれば、まず間違いなく悪魔（害虫みたいな存在）がそことは別の世界から攻めてくるのじゃ」

「だから結局何でおれを召喚したんだ。言つておくが俺が部活で剣道をしてるつて言つても戦場なんかに行つたらすぐに死んじまうぞ？」

「そんなことは分かつておる。今説明してやるからの」

爺さんが言うには今から2年ほど前に自分が管理している世界の一つで強い悪意を感じたそうだ。それで部下にその世界を探らせたが特に異常はなく気のせいかとも思ったが一応、周りの世界も探らせるると武力を強化して隣の世界を侵略しようとしている悪魔たちに気づいたらしい。このままではいかんと、自分が管理している（神が現在管理している世界だけでも結構な数がある）世界で最も適任であろう存在を探していたそうだ。ただし、もうすぐ死ぬ人限定で、そしたら1番その条件に一致していたのが俺らしい。ただしこれはほとんど性格で決めたらしい。力は異世界に行つて修業したり、神が加護を与えることによつて解決するんだと。そしてどうして死ぬ人限定かと言つと殺してしまえばまず積極的な協力は得られんし、

一番の理由は神が世界に干渉すると普通の世界ではその反動で地震やら津波といった災害が起こってしまうらしい。神の力が強力すぎるために……。だからこうして俺を探し出して協力を頼んでいるらしい。

「お主を召喚した理由はこんなところじゃな　いまさら何じゃがよく考えてくれ、向こうに行けば危険もあるし人間なんかも殺すことになるじゃろうからの」

「そうか……。よし決めた」

「どうするんじゃ」

「おれはやっぱり行くことにする。　どうせ死んだんだし、つらいこともあるだろうが楽しそうだしな。」

「わかった。　それでおぬしに与えるかごじゃが」

「ああ、どんなかごなんだ」

「まず与える事が決まっているのは、簡単にいえば才能かの。」

「才能？」

「そうじゃ。　魔術や武術などはもちろん商才などいろんな才能じゃ。　要するに成長速度……。学習能力がとつもなく速くなるんじゃ　一月もあればその世界で超一流といわれるくらいじゃ　ただしこの能力はあくまで学習能力の向上じゃから努力しなければ今のままじゃからの。」

「それはいいがそれだけで敵を倒せるのか？」

「決まっておるのはこれだけじゃあとが三つくらいまでなら能力を授けることができるが後からの変更できんからよく考えるんじやな　1時間くらいしたら呼びに来るのでなそれまでにかんがえてくれるとうれしいんじやがの」

「そうか……」

「そろそろ決まったかの？」

「ああ、一つ目は俺が望んだ魔術を作れる能力、二つ目はこの世界の科学や武術などの知識だ、もちろん全部な、そして三つ目はこれは能力じゃないんだが俺に魔術や武術の師匠をつけてほしい」

「わかった　そういうことなら初めの2〜3年は修行じゃな。向こうに行ったら会えるようにしておく。注意事項じゃが魔術については作れても魔力が少ないうちはあまり派手な魔術は使えぬからのただ、研究して消費魔力を少なくすれば使えるものもあるじゃろう。」

「分かった」

「では早速送るからの」

爺さんが何かつぶやくと魔方阵が浮かび上がり俺は異世界に行った。

死んで気付いたら変な爺さんと会った(後書き)

勢いで描いたのでぐだぐだですが頑張って書いていきたいと思いますのでどうか見守ってください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0424y/>

---

異世界での日常と非日常を楽しむ俺

2011年10月30日03時19分発行